

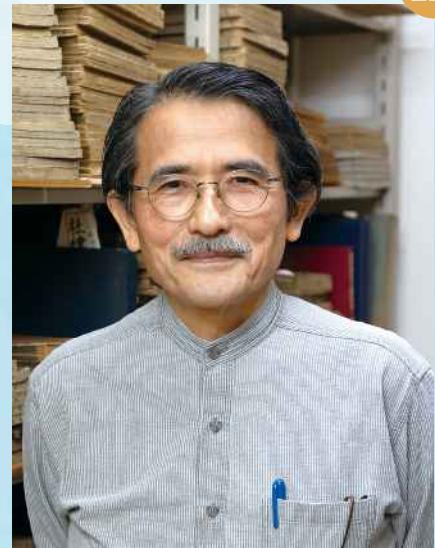
# ゆうゆう

## インタビュー

NO.  
220

林 望はやし  
のぶむ  
さん

(作家・国文学者)



撮影:七戸 隆弘

### 文学好きは 祖父の頃から脈々と

#### 祖父の頃から脈々と

『寧日雑録』は一〇一一年十二月に始まりました。健脚ぶりを何度もご紹介くださいたお父様の雄二郎さんを九十五歳で亡くされた頃だったのですね。東京工業大学から早稲田中学の数学教師を経て経済安定本部へ。そして東京工業大学教授に、というご経歴。

#### 林父は若い頃は小説家になりた

かつたらしいです。中学生のときに書いた国文法の分厚い原稿が残つておりまして、かなり正統的に勉強したらしいです。

元軍人で漢文の先生だった父方の祖父も大変な読書家で、書棚にはたくさんの漢籍がありました。僕が古い本を調査研究する学問に進んだのはその影響もあつたかもしれません。

生まれは墨田区吾妻町。最初の記憶は二歳と、第三十五回で。林赤土が風に煽られて舞い上がり、あたり一面砂塵に閉じられていた景色を覚えてています。自転車

の荷台で、前でペダルをこいでいる母にしがみついて乗っていた記憶も。後期高齢の爺さんになつても忘れないんですね。

幼少期は大人しくて臆病。敷石のアリの行列を丹念に観察したりと、何か一つことに注目するとその対象にどこまでも集中していました。一人でも困らず、心の中で独自の世界を想像して楽しむような子どもでした。

#### 学校に入つてからは?

林向こうつ気が強くてね。小学校に上がるときには読み書きができたし、漢字もそうとう読めたんですよ。でも、先生は毎回指してはくれないでしょう。指された子がはずれた答えを言つたりするのが納得できず、当てられもしないのにとつと黒板に答えを書いて、あげくの果てに担任の徳良先生に注意されると先生のズボンに緑のクレパスで「バカ」と書いた。でも徳良先生は本当にかわいがつてくれた。憎めないキャラクターだったのかな(笑)。まっすぐ進んだのは徳良先生のおかげだと思います。

『寧日雑録』は、今回、本誌エッセイ『寧日雑録』の連載が五十一回目となる林望さんをお迎えしました。日本書誌学・国文学の研究者であり、作家としてリンボウ先生のニックネームでもおなじみ。『イギリスはおいしい』からのイギリス三部作はベストセラーとなり、イギリスブルムの火付け役になりました。バリトン歌手として多くの舞台を踏むほか、歌曲などの作詩や作能も。その多彩な才能のルーツは? これまでの『寧日雑録』を振り返りながら、読み書きの愉しみ方についても伺いました。



7歳頃、ヴァイオリンの発表会で親切なママと一緒に歌を歌つて、お世話になりました。6歳から7歳まで続けた機会をやめてしまいました。

林 父と母は蚤の夫婦で母は大女。手八丁口八丁で、お裁縫もできれば料理も上手いし運動も万能。父は仕事漬けでしたから、母は父親業も兼務していました。

たいへん声楽が好きで、台所仕事をしながらいつも歌を歌っていました。ママさんコーラスにも参加して、後年孫たちにも西洋の子

京坊ちゃんには台風の日に息子たちを守る頼もしさも。第六回に、その頃のお母様とのエピソードがありました。雪の降る日にお母様がお風呂で雪うさぎを作ってくれたこと、ご著書『東京坊ちゃん』には台風の日に息子たちを守る頼もしさも。

守歌を歌っていました。僕がヴァイオリンを習い始めたのは自分の意志でしたが、妹はピアニストになり、兄もマリンバを習っていました。家庭の中に音楽は多かったですね。

林 声楽はバリトンの歌い手で舞台にも。音楽好きの素地はご家庭にありました。

林 声楽は東京藝術大学の音楽学部の先生になつて機会を得てから、やつと習い始めました。先に習つたのは能の謡で、観世流能楽師の津村禮次郎さんに師事し、小金井新能で長年一緒に過ごしました。楽譜の蒐集についても何度も書き込みましたね。八方手を尽くして原稿を探して買うのは、作曲というクリエーションの當たりに興味があるからです。僕は書誌学者なので、音楽についても原点に遡つてアプローチしたい。原譜入手して元々の詩がどう解釈されて作曲されているかを突き止めずにはいられないんです。

紙本や古地図、水彩や木版の風景画等々。見つけるコツは？

林 探したときに見つかるとは限らないので、前広にアンテナを張っておきます。例えば楽譜なら、音楽畠の古本屋さんが定期的に送つてくる目録から、そのとき興味はなくとも将来研究の材料になりそうなものをとりあえず買っておく。研究はあとからついてくる

ということがよくあるのです。これは拙書『役に立たない読書』にも書きましたが、本つて、あらかじめ面白いと分かつて読むものじゃないでしょう？ 読んでみたらつまらなくて途中でやめる、気に入つたら読む、の繰り返し。食べてみるとおいしいかどうかわからないのと一緒です。たくさん読むより、本の内容についてじっくり考えることが大事だと思いません。

高校時代はラグビーにも熱中。「現代国語はもつとも苦手だった」と第九回に。

林 そうです。現代国語は教わらなくて分かるし、段落に区切るとか、一定の読み方を押しつけられるのが嫌だったんです。地学や生物が好きでした。都立戸山高校には自分流で教える先生が多く、生物の春田俊郎先生は、一年中當時最先端だったDNAの構造について、地学の小島公長先生は、岩石の組成の話を。今でも頭に残っているのは、自分が面白いと思うことを教えてくれたからだし、ナイーブな時代にアカデミズムの最先端にふれたことで、「研究」への憧れがかたち作られました。

## 詩を書いているときが一番楽しい

最も愛する詩人だという田中冬二をはじめ、詩も多く取り上げま

した。第十三回では「若き日は詩人になりたかった」とも。

林 今も一番楽しいのは詩を書いているときです。高校の頃は萩原朔太郎、三好達治が好きでした。早稲田通りの古書店で最初に買ったのも高校生のとき。三好達治の『故郷の花』です。朝な夕なにその詩を眺めていると、惹きつけられるものがありました。

紙本や古地図、水彩や木版の風景画等々。見つけるコツは？

林 探したときに見つかるとは限らないので、前広にアンテナを張っておきます。例えば楽譜なら、音楽畠の古本屋さんが定期的に送つてくる目録から、そのとき興味はなくとも将来研究の材料になりそうなものをとりあえず買っておく。研究はあとからついてくる

ということがよくあるのです。これは拙書『役に立たない読書』にも書きましたが、本つて、あらかじめ面白いと分かつて読むものじゃないでしょう？ 読んでみたらつまらなくて途中でやめる、気に入つたら読む、の繰り返し。食べてみるとおいしいかどうかわからないのと一緒です。たくさん読むより、本の内容についてじっくり考えることが大事だと思いました。

高校時代はラグビーにも熱中。「現代国語はもつとも苦手だった」と第九回に。

林 そうです。現代国語は教わらなくて分かるし、段落に区切るとか、一定の読み方を押しつけられるのが嫌だったんです。地学や生物が好きでした。都立戸山高校には自分流で教える先生が多く、生物の春田俊郎先生は、一年中當時最先端だったDNAの構造について、地学の小島公長先生は、岩石の組成の話を。今でも頭に残っているのは、自分が面白いと思うことを教えてくれたからだし、ナイーブな時代にアカデミズムの最先端にふれたことで、「研究」への憧れがかたち作られました。

### 後に教える立場にも。

林 高校で六年、大学で二十年教えました。最初は大学院の博士課程のときに慶應義塾女子高校で国語を。受験がないのを幸いに、教科書は一切使いませんでした。生徒たちに古典の面白さを分からせてあげたくて、教材研究をして真剣勝負で授業に臨みました。

その後ですね。K教授の蔵書を段ボール五つ分買い取ったのは、買い取り金額は給料の二ヶ月分！（第三十九回）

林 国文学の研究者は特に、本がなくては立ち行かないんです。あちこちの図書館にこもつていては、いくら時間があつても足りないから、収入のすべてを本に使ってしまう。その結果、今書庫には本が二万冊くらいあります。

イギリスに滞在したのは、大学で教えてながら研究を続けていたときですね。

林 三十代のとき、大学のサバティカル（研究のための長期休暇）で、ロンドン・ケンブリッジ・オックスフォード大学を自動車で駆け回

り、丸一年日本古典籍の書誌学的調査研究を。帰国するとケンブリッジ大学から、和漢古書の総目録を作つてほしいと客員教授として招聘され、妻と、小学生だった息子と娘と一緒に一年間、ケンブリッジで暮らしました。そうしてできたのが『ケンブリッジ大学所蔵和漢古書総合目録』です。当時はまだ非力だったパソコンを活用。文字入力が、物書きになつてから有力な武器になりました。

一度新潮社から「作家の原稿展」に生原稿を出してくれませんか」と言われたことがあつたけれど、持つていないので、自分の本を見て原稿用紙に書きましたよ（笑）。

イギリスでの経験を綴つた『イギリスはおいしい』で作家デビュー。イギリス滞在はターニングポイントでしたね。

林 表現者でいたいという思いがあるんで、どのみち研究者では收まらなかつたようになりますが、それまでは古典文学だけの世界にいた僕にとって、イギリス滞在はすべての変わり目でしたね。英語で暮らしたこと、そして、下宿先

が児童文学作家のルーシー・M.ボストンさんの家だつたことは素晴らしい体験でした。

閉館時間まで図書館に閉じこもり、帰宅してご飯をつくつて食べて寝るという生活でしたが、見かけない野菜に出会つたり、料理を通していろいろな人と出会つたり、食事をつくる体験は実に面白くて、『イギリスはおいしい』ができたんです。

## 古典文学は千年以上の ロングセラー

古典文学を分かりやすく紹介する本もたくさん書かれています。

今年は大河ドラマ「光る君へ」の影響で、『謹訳源氏物語』が再注目されていますね。約四年かかりで二〇一三年に最終帖を発行。第十七回には、書き終えたときに思わず詠んだ一句がありました。

林 「完の一字置いて余寒の朝明けぬ」ですね。研究者として学問的方法に基づいて解釈し、同時に作家として分かりやすく、面白く現代語訳をつけたくて、土佐日記、



『(改訂新修)謹訳源氏物語』(祥伝社文庫)は全10巻。オーディオブック配信サービスの[audiobook.jp](http://audiobook.jp)では、林さん自らが全巻朗読しています

枕草子、平家物語など古典を読み解く作品を書き続け、行き着くところが『源氏物語』という牙城でした。「謹訳」としたのは、作者の言いたかったことを、その行間までも謹直に掬い取りたいという思いを込めて。読めば読むほど、この物語は遠い昔の絵空事ではなくて、今の僕たち自身の問題に通じていることが分かります。僕も、大人になつて人の親になり、幾多の辛酸も嘗めなどして、この物語が描き出す「人生の実相」が、まるで自分の事のように生き活きと感じられるようになりました。

千年以上も読み継がれてきた古典の面白さをぜひ味わっていただきたい。現代国語はやらないでいいから古文だけをやってほしい、とあちこちで演説しているんですが、賛同は得られません(笑)。

## 言葉はすべて イメージとともにある

第三十五回に、四歳頃から住んだ大田区石川台に七十代になって再訪したことを書かれていました。道を曲がった先に何があつたかとか、鳥瓜が真っ赤に熟れていった景色まで細やかに覚えていらっしゃるのが驚きでした。

林 あの道を通って行ったら左側がカリント工場で、いつもカリントのいい匂いがしていたとか、五感で覚えてています。五感で感じたことが映像になつて焼き付いているんです。それは幼少期だけでなく大きくなつてからも、今もです。僕は料理が好きで、きょうだいの中で僕だけが母を手伝つていました。今でも毎日キッチンに立ちますが、デコレーションケーキを作

れと言わればできますよ。母の手つきを画像として覚えているんです。

第十七回「俳句のある日々」には、「一幅の写実画を文字で描いてみる、そんな心組みが望ましい」とありました。

林 いつも、どういうふうに描写したらこの風景を文章化できるか考えていました。心象風景的なものを描くときでも、心象を写生していられる感じです。大事なのは細かく観察して見たままを書くこと。俳句でもなんでも、文章を書くときは実感が大事だと思うんです。前もって全部調べて行って「ああやっぱり」というのでは実は何も見たことにはなりません。何もないところから見たときの驚きを大切にしたいですね。

何でも「スゴイ!」「カワイイ!」「旨!」ではダメですね。

林 僕はおいしいものを食べたときでも、どうおいしかったというのを言葉で表現したくなるんですよね。自分の思いだけをポツポツと言つて、あとは「旨!」とか「めつ

ちゃおいしい!」でおしまいといふのは残念。

どこが「めっちゃおいしい」のか

ちやおいしい!」でおしまいといふのは残念。

林さんの文章は端正なのにユーモアもあって、クスッと笑ってしまう場面があります。ユーモアのセンスのルーツは?

林 そのときの景色、雰囲気、空気感を描写できるかは、人に読んでもらえるかどうかの瀬戸際です。世阿弥の言葉に、演者は体を離れた客観的な目線を持つという「離見の見」があります。読んだ人がどう思うかをイメージしながら、具体的に書くほうがいい。『寧日雑録』では、思い出話を書くのでも、その時代のことを書いたら共感を持つてくれると思いながら書いています。言葉はすべてイメージとともにあります。

『寧日雑録』五十一回目からの抱負をお聞かせください。

読む人のことを考えて書くという意識が大切ですね。

林 内田百閒、夏目漱石、徳富蘆花といった文章の達人たちの隨筆を読むと、なんとかして文章で分からせたいという気持ちが伝わってきます。隨筆文学の面白さを経験していただければ、自分で書くときの参考になると思いますよ。

林 誰もが広くいろいろなものを読んだり文献を手に入れられるわけではありませんから、一生懸命探しして、面白いと思えばそれを紹介して、エッセイを通して読書体験をしてもらえば本当にうれしいです。自分が接した本や、さまざまなものについて案内役をつとめるつもりで、読者の方々のことを思ひながら、今後も楽しみながら書いていくつもりです。